

2021年4月25日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「金持ちとラザロ」

聖書：ルカによる福音書16:19～31

私たちの社会は、相も変わらず富める者はより豊かに、貧しき者はさらに貧しくされる社会がまかり通っている。このような社会を神はどう見ておられるのか？

「金持ちとラザロ」の話は、可能な限り対照的な裕福な者と貧しい者を現している。この世では金が有るか無いかで不平等な世界がつくられている。しかし「死」は金が有る無しに関係なく平等に迎えるもの。この物語では、死後の世界では貧しき者は慰めを受け、富める者は苦しみを受けるといった形勢逆転が記されている。死後の世界は決して平等ではないと記す。この金持ちの関心事は、あくまでも自分たちの兄弟のことで、死後の世界でも豊かに暮らせるような道筋を願っている。この金持ちにはラザロのような貧しい者への視点はまったくない。

この物語はたとえ話である。死後の世界の説明ではない。私たちはこの物語を地獄に落ちないために、聖書の言葉、牧師の言葉に耳を傾けて行かなければならないという教えとして聞いて来なかったか？

この箇所は、死後の世界の話ではなく、現実社会を風刺的に記している。この世の社会はいつの時代も富める者はなお豊かになり、貧しき者はいつまで経っても貧しいままにある。それは、力ある金持ちが、死後の世界においてもなお自分たちの豊かさだけを追い求めているからで(16:27-28)、これは強烈な皮肉である。金持ち(権力者)は、金を身内、仲間のみ、国家のみで使いまわそうとする。自分たちだけが豊かであればそれでいいという考えは、これはもう神の目から見れば、死者の状態であり、死後の世界を現すかのように映るといふこと。貧しい者が門前払いされる社会、犬になめられるような屈辱的な社会に憤りをもってこのルカ福音書は記されているかと思う。

屈辱的な社会と言え、この沖縄はまさに屈辱的な歴史を積み重ねている。今年、大きく問題視されていることは、辺野古の新基地建設埋め立て用に南部戦跡地の土砂、糸満市や八重瀬町の土や石を採取し、軍事基地建設の埋め立てに使うとしている。これは決して許されることではない。南部地域では、今も多く沖縄戦で亡くなった方々の遺骨が未発掘のまま眠る。沖縄戦遺骨収集ボランティア「ガマフヤー」代表の具志堅隆松さんは、「戦没者の遺骨を、軍事基地を造るために海の埋め立てに使うことは許されない。犠牲者に対する冒瀆だ」と語る。

この現状は、神の目から見ればどのように映るのか。歴史を顧みず、人々の思いを踏みしめる行為は、神の思いに反することであることは言うまでもない。「金持ちとラザロ」の物語は、この世の不条理な在り方、人間の尊厳が蔑ろにされている世界への神の怒りを表していると言える。(神谷)